様式１　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（表面）

**平成２９年度　東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費　要求書**

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **事業名**  **（要求事項）** | | | コミュニティ復興の手がかりとしての「民俗芸能」 | | | 新規 | |  | | | | | | |
| 継続 | | 開始年度：平成24年度 | | | | | | |
| **代表者** | | | 氏　　名 | 所属部等局名 | | 職名等 | | | | | | | | |
| 梅屋　潔 | 国際文化学研究科 | | 教授 | | | | | | | | |
| **組織構成者** | **学内**  **３名** | | 氏　　名 | 所属部局・職名 | | 役　割　分　担 | | | | | | | | |
| 岡田浩樹  土取俊輝  荒木真歩 | 国際文化学研究科・教授  国際文化学研究科・博士後期  国際文化学研究科・博士前期 | | 副代表、連携事業との折衝  現地調査、資料の整理・集約  現地調査、資料の整理・集約 | | | | | | | | |
| **学外**  **4名** | | 氏　　名 | 所属機関・部局・職名 | | 役　割　分　担 | | | | | | | | |
| 川島秀一  庄司幸男  金菱　清  川村清志 | 東北大学・災害科学国際研究所・教授  元気仙沼市教育委員会  東北学院大学・教授  国立歴史民俗博物館・准教授 | | 民俗学、現地コーディネータ、現地調査  市民コーディネータ、現地調査  環境社会学、関連事業との連携  民俗学、現地調査、資料の整理・集約 | | | | | | | | |
| **要求理由（概要・目的）** | | | | | | | | | | | | | | |
| **１．概要**　「体は覚えていた」という一言は、ようやく祭礼・芸能を復活することができた被災者の口をついて出た言葉である。震災で失われたコミュニティの記憶、そしてその再構築の大きな手がかりとなるもののひとつが「民俗宗教」であり「民俗芸能」である。復興された祭礼、そしてそれに伴う「民俗芸能」の奉納などは、単に復興のシンボルにとどまらず、コミュニティの単位をしるしづけ、主体的に構成されるものであることが解明されてきた。このプロジェクトの関連事業による聞き取り資料の活字化は、現地に一定の影響を与え、地域活性化の議論を巻き起こしている。本計画はそれに加え、「民俗芸能」の中核を占める「身体技法」を主な伝承媒体として記録対象に加えるとともに、中心を気仙沼市内に特化して計画された。**２．目的**　この事業は、地元の人々の手によって復活しつつある「民俗芸能」あるいは滅んでいく「民俗芸能・儀礼・祭礼」の復活・保存・記録に住民とともに関与し、彼らの復興事業にともに関わり、そのエンパワーメントに寄与しようとする。 | | | | | | | | | | | | | | |
| **計　画　・　方　法** | | | | | | | | | | | | | | |
| **１．計画**気仙沼市文化協会には、震災前の「民俗芸能保存会」リストが保存されている。それぞれの「保存会」の責任者を訪れ、当該民俗芸能の現状をうかがってみると、震災の復興過程がそれぞれの「保存会」の帰趨から見て取れることに気づかされる。すなわち、①消滅したもの②復興前の姿にほぼ復帰したもの③その途上④震災前よりも活性化したもの⑤震災前はなかったが新たにつくり出されたものに区別することができ、それぞれがその儀礼実践を支えるコミュニティの置かれた立場をあらわしているのである。**２．方法**　5つのパターンに置かれた民俗芸能のうち、それぞれの典型的なものを選び出して、記録・保存に寄与することを計画している。東北大学、東北学院大学、教育委員会、気仙沼文化協会などの協力を得て、当該の「保存会」「寺社」などの責任者を訪れ、震災の以前・以後の現状を詳細に聞き取り、芸能の細部について映像・画像などの媒体に保存する。変化が起こった主原因を担い手たるコミュニティの置かれた状況と照らし合わせて考えることで、コミュニティのレジリアンス、再編成の際の力学を解明する。これらの知見を東北大学他、行政や、地方のアクターと広く共有して検討することで広義のエンパワーメントを可能にすることができると考えている。リストにあがっている保存会を訪ね、①、②、③、④、⑤の類型に分けて考えた上で、その震災前、震災後、そして現況を時系列的に追認するほか、それぞれの「芸能」の伝承状況をコミュニティの解体、修復、再編状況とともに記録し、他地域のそれとの比較対象を経てその独自性を確認し、存在意義を再確認し、それらの活動を振興しようとする。文化庁や宝くじなど当該保存会などの取得可能な助成金の応募に協力もする。これまでの言語的な媒体にもとづく聞き書きに加えて、「芸能」の中核をなす身体技法も伝承の媒体として重要な役割を果たしているところから、伝承音楽芸能の「採譜」「映像化」の他、多角的な角度からの記録保存の可能性を模索する。 | | | | | | | | | | | | | | |
| **期待される具体的な効果･今後の展開** | | | | | | | | | | | | | | |
| **１．期待される具体的な効果**　復活した祭礼の典型（②）として「八幡神社オサガリ」「八雲神社オサガリ」が知られている。その儀礼にかかわるコミュニティの再編過程とその力学は、ビビッドに見て取れる資料が蓄積されるはずで、そのことで当該の鹿折地区の強みが再確認されると考えている。滅びた儀礼（①）の典型としては、「尾崎の大名行例」がある、担い手が複数の仮説住宅に分散したため、解散を宣言したものであるが、これまでの調査で、それ以前にも何度か途絶えていたことが分かっている。分散したコミュニティが今後どのように再編されるのか注目される。震災前の映像資料（VHS）の存在を知っているので、それをデジタル資料としてアーカイブ化することができれば、地域の共有財産となるだろう。活性化する儀礼（④）としては小谷館八幡神社の祭礼があげられる。管見するにひとつのファクターとしては、もともと宮司が私塾を開設していたことがあって、人的リソースと世代を超えた紐帯が強力だった。独自で震災復興祈念パンフレットを発刊するなど、例外的に震災後急激に活気づいた事例である。イベントの中心人物のなかには、気仙沼市どころか宮城県外からの人的リソースも散見され、復興のあり方として注目されている。一連の復興イベントのなかで、つくられる民俗芸能もあとをたたない。それらの組織化そしてアイデンティティ形成と再編成の様態もまた、復興のひとつのあり方をプロファイルすることができる。**２．今後の展開**　これらの事例の蓄積と、活動への協力は、復興に向かう地域振興にも資することは言うに及ばず、東北大学、東北学院大学、気仙沼市を含む、われわれ実施者と市民の地域およびコミュニティの認識を正確なものとし、今後の震災復興事業に対する処方箋のバリエーションを豊富にする。この処方箋は、他地域にも応用可能な形に鍛錬可能なはずである。 | | | | | | | | | | | | | | |
| **平成28年度の成果および平成28年度と平成29年度の取組みの違い（※　継続課題の場合のみ記載）** | | | | | | | | | | | | | | |
| 市民も共著者として参加するなど、平成28年度の成果は、対象となった「保存会」を中心に現地でも広く読まれ、保存会の存在意義を肯定的な意味で反省・再同定する機会を提供した。平成29年度の事業においてもっとも大きな変化は、口頭の言語媒体から身体という媒体へという媒体の変化である。これまでの事業では、「民俗芸能」とコミュニティの結びつきをここまで強いものと考えていたわけではなかった。東北大学側のカウンターパートもこの分野の専門家を選んだ。本年度は、「民俗芸能」に関与の対象を絞っていくことで、東北大学等との関係もより緊密となり、限定的にコミュニティの復興状況が明確になるはずである。資料論的には、音声言語の記録という口頭伝承の資料的操作から、身体を媒体とするものへ、蓄積される資料の質がシフトした。 | | | | | | | | | | | | | | |
| **経　費　使　用　内　訳　・　明　細** | | | | | | | | | | | | | | |
| 費　目 | | 品　名 | | | 仕　様 | 単　価 | 数　量 | | | 金　額 | | | | |
| 旅費・謝金 | | 旅費（神戸⇔宮城）  謝金  現地コーディネート謝金  録音書きおこし、太鼓などの採譜 | | |  | 9  6  8  12  千円 | 6  10  10  10 | | | **計** | 540  60  80  120  **800千円** | | | |
| 消耗品費 | |  | | |  |  |  | | | **計** | **0千円** | | | |
| その他  (会議費・諸経費等) | |  | | |  |  |  | | | **計** | **0千円** | | | |
| **合　　計** | | | | | | | | | |  | **800千円** | | | |
| **他の事業等での配分状況の有無（現在申請中も含む）** | | | | | | **有** |  | | | **無** | | |  | |
| ※「有」の場合，下記項目を記入してください | | | | | | | | | | | | | | |
| 募集機関名：　　　　　　　　事業名： | | | | | | | 申請中 | |  | | | 採択済 | |  |

**平成２９年度　東北大学等との連携による震災復興支援災害科学研究推進活動サポート経費　実施報告書**

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 事　業　名 | コミュニティ復興の手がかりとしての「民俗芸能」 | | | | | |
| 代　表　者 | 部局名：国際文化学研究科　職名：教授　　　　　氏名：梅屋　潔 | | | | | |
| 事業の実施内容 | 震災で失われたコミュニティの記憶、そしてその再構築の大きな手がかりとなるもののひとつが「民俗宗教」であり「民俗芸能」である。復興された祭礼、そしてそれに伴う「民俗芸能」の奉納などは、単に復興のシンボルにとどまらず、コミュニティの単位をしるしづけ、主体的に構成されるものであることの考え方から、「民俗芸能」の中核を占める「身体技法」を主な伝承媒体として記録対象に加えるとともに、中心を気仙沼市内に特化して計画された。この事業は、地元の人々の手によって復活しつつある「民俗芸能」あるいは滅んでいく「民俗芸能・儀礼・祭礼」の復活・保存・記録に住民とともに関与し、彼らの復興事業にともに関わり、そのエンパワーメントに寄与しようとするものである。 | | | | | |
| 事業実施の成果 | 「打ち囃子」という気仙沼市内に広範囲に形を変えて伝承される芸能に絞り、そのいくつかの団体のいくつかの曲について、現地のひとびととともに記録作業を開始した。いくつかの楽曲については楽譜ドラフトを作成した。民族芸能は宣伝や行政へのコネクションなどから、驚くほど経済的に潤っている団体とそうでない団体とにわかれる。われわれは共通する「打ち囃子」という演目に注目し、両者をつなぐ形のネットワークを構築した。助成や補助は団体単位についているため、地元教育委員会にとっても「打ち囃子」はあることは知っているが、それを単位に考えることがない「盲点」であった。奈良県で市史編纂に携わった経験をもつ大学院生が関与したことにより、教育委員会でも他地域と同様の基礎的な調査を行うことができ（結果資料の散逸が確認された）新たな方法として、一般のホームビデオなどによる映像記録の収集という新しい手法が提案された。なにより本計画については、教育委員会など地元の市民レベルでの「興奮」が感じられた。 | | | | | |
| 今後の計画 | 「民俗芸能」に限らないが、「伝統」（それが何を意味するにせよ）を受け継ぎ、それを維持し、次の世代につなげる。人類ならばどの集団でも行っているこの当たり前のことを「ともに」行っていく、というのが一連の私たちのプロジェクトのモットーである。震災では、それを自力で行うことが困難なので、若干遠くから手をさしのべようとしているわけである。もともと細く、長い関係性をめざしており、派手な宣伝効果は望めないかも知れないが、地元では「知る人ぞ知る」存在感をもっているプロジェクトと自負する。成果を書籍にまとめられそうな分量にもってきているので、計画もたてて行きたいと考えている。 | | | | | |
| 配　分　額 | 496千円 | | 支　出　額 | 496千円 | |  |
| 支出額内訳 | 区　　分 | 員数 | 単価（円） | 金額（千円） | 備　考 | |
| 旅費  印刷用トナーカートリッジ | 2名  3個  1個 | 123,277円  72,340円  79,740円  62,020円  32,480円  89,480円  9,242円  8,937円 | 460  36 | 気仙沼、仙台、東京・6回  調査用紙、説明書類印刷 | |
| 計 |  | 496,000円 | 496 |  | |
| 本事業に係るご意見・希望等 |  | | | | | |

（備考）活動の成果を別途とりまとめている場合，又は印刷物，ホームページ等にまとめている場合は，作成後，本書と共に１部提出してください。提出期限日は平成30年4月27日（金）です。

（裏面）